

地域・教師・児童の学びと意欲を変えたマイタウンマップコンクール

富山市立山室中部小学校 教諭 笹原 克彦

sasa@sasatto.net

キーワード: 学校 Web ページ, 情報活用の実践力, 外部人材, 地域との連携

1. はじめに

富山市立寒江小学校では、筆者の在任していた平成16～18年度にかけて、学習の成果をWebページにまとめ、地域に発信する実践を行い、マイタウンマップコンクールにおいて高い評価を得ることができた。

Webページに、実践を公開することによって、児童は、学習した内容について他者を意識した表現を行い、学習内容に対する責任を感じ取ったり表現力を伸長させたりといった力の向上が見られた。教師にとっては、生活科、総合的な学習の時間の教育課程の編成の仕方や、そこで培われる児童の能力についての理解が進むきっかけとなり、年間を通した息の長い実践に、意欲を持続させながら継続的に取り組むことができた。受賞経験が、教師や児童の自己有能感を高めるきっかけとなった。学校の教育活動に対する地域（PTA、教育後援会）の理解が進み、学校の教育目標に応じた支援が得られるようになった。

本稿では、それらの変化を可能にした実践の概要と、実践上の留意点を明らかにする。

2. 実践の概要

2. 1 学校の実態

富山市立寒江小学校は、各学年1学級の小規模校である。児童は6年間、学級編成を行うことなく卒業する。そのため、児童間の人物評価が固定化する、言葉が少なくとも意思の疎通が図れるために公的な場所での表現を苦手に行っている、という児童の実態が、学校全体としての課題ととらえられていた。本実践では、上記の実態をふまえ、生活科、総合的な学習の時間を中心に、次の力の育成を意図した。

①自他のよさを見つけ、自己のよさを認めていく力	②言葉や文章によって自己の考えを表現できる力
-------------------------	------------------------

2. 2 単独学年での実践

平成16年、第4学年は、①の育成のために、「わたしたちのまちのバリアフリー」をテーマに、福祉という観点から自分たちの住む町のよさを、体験を通して見つける総合的な学習の時間の実践を行った。また、②の育成の手だてとして、学習の成果をプレゼンテーションしたり、Webページでまとめたりする活動を取り入れた。成果を、全国プレゼンテーションコンテストやマイタウンマップ・コンクールに応募するように働きかけ、より具体的で分かりやすい表現や、自己の発信する情報に責任をもつことの必要感が感じられるようにした。

全国プレゼンテーションコンテストでは、代表児童4名が、全国大会に出場した。他校の発表に触れ、言葉と画像で情報を伝えることの大切さと方法を学び、全国レベルの表現力を身につけることができた。

平成17年度、第5学年では、「大豆がささえるわれわれの暮らし」をテーマに、食育という観点から総合的な学習の時間のカリキュラムを構想した。栽培活動を通して栽培の苦労を体験すると同時に、大豆を契機とした食を巡る探究によって、問題の本質を実感的に解決しようとする実践を行った。

年度当初より、マイタウンマップ・コンクールへの応募を前提に、情報発信に努めた。このことが、児童の追究意欲を持続させ、「本気の実践」を可能にした。学習の節目毎にWebページをまとめることによって、「全国の人にはこれで納得してくれるだろうか」といった見直しが行われ、責任ある情報をより分かりやすい表現で発信しようとする態度を育成することにつながった。

この実践では、課題解決のために、外部人材の協力を積極的に仰いだ。児童の問題意識に対応し、専門的な知識を得るための外部人材の招請のタイミングや、学習のねらいを達成するための十分なディスカッションの必要性など、外部人材の協力を得るためのノウハウを蓄積できた。

本実践では、児童による表現の場をさらに多様にした。ポスターセッションによる学年内発表、全校児童・地域を対象とした学年全員によるプレゼンテーション、保護者を対象としたグループによるプレゼンテーションなど、多様な手段によって様々な対象に伝える場を設定し、適切な表現方法を身につけることができた。また、ポスターやプレゼンター



図1 単独学級によるWebページ作品



図2 全校児童によるWebページ作品

ションも、Web ページで公開するため、学校外の他者を意識した表現をすることができた（図 1）。

Web ページは第 12 回マイタウンマップ・コンクールで内閣総理大臣賞を受賞し、授賞式で 1 年間の成果をプレゼンテーションする機会を得た。このことが自分たちの能力の伸長を自覚し、自己有能感を高める機会となった。また、PTA、教育後援会等地域団体からは、学校の教育活動への理解、協力がより一層得られるようになった。

2. 3 全校児童による実践

2. 1 に示した力の育成を図ることは、他の教師にとっても共通の願いであった。そこで、平成 18 年度は、全職員で相談し、学習の成果をまとめた Web ページを全校で発信する過程を通して、2. 1 に示した力を育成しようと考えた。

実践にあたっては、1、2 年生は生活科を、3～6 年生は、総合的な学習の時間を中心に、社会教育施設や福祉施設等での体験活動や、探究活動、表現活動を取り入れていくことあらかじめ共通理解した上で、実践を進めた。その際、教師にとって最も不安だったことは、最終的な成果を Web 化してまとめることに対する負担感であった。

そこで、教師の負担感を減らすために、年度当初に、以下の点に留意し、日頃から情報を蓄積しながら実践を進めるよう共通理解を図った。

- ① 体験を伴った実践を進め、記録をデジタル化して残すこと
- ② 実践の概要がつかめる写真を撮り集めておくこと
- ③ 公開を意図した作品を作成をするなど児童の表現活動の場を設けること

富山市では、学校 Web の更新システムとして、CMS（Content Management System）が導入されており、文と写真で公開していくことで実践概要の蓄積が容易にできた。また、児童作品は、非デジタルな作品でもスキャンして活用することにした。これらの取り組みは、従来の学習でも行ってきたことであり、教師も児童も、さほど負担感なく実践に取り組むことができた。ただし、作品は外部への公開を前提としているため、発信する情報に対する児童の責任感や教師の働きかけも、それらを意識したものになった。

外部人材や関係機関に協力を求める際には、教師が事前に働きかけて学習内容の相互理解を十分行うなど、昨年度の実践のノウハウを基に、学習の意図に沿いつつ相手の意向もふまえた活動を行うことができた。また、地域ボランティアも、学習の実情に合わせて協力する内容を考えるようになっていった。

また、昨年度の実践をモデルに、表現活動の場を設けることによって、小規模校の課題を克服し、公的な場での表現の仕方（大きな声を出す、分かりやすい表現でまとめるなど）を児童が理解して、実践するようになった。

蓄積した実践の記録を、集約した Web 作品（図 2）が、第 13 回マイタウンマップ・コンクールで経済産業大臣賞を受賞した。この受賞は、実践に取り組んだ児童や教師の満足感、有能感を高めることになった。報道により Web ページの閲覧者が増え、地域住民から激励の言葉が届くなど学校の教育活動に対する理解もより一層広がった。

3. 児童の力の高まりを引き出す実践を行う際の留意点

本実践を通して、児童の自己のよさを見つける力や表現する力を高めるには、以下の点に留意するとよい。

3. 1 児童へのはたらきかけ

（1）学年の一部、学年全体、学校全体へと段階的に学び方を身につける

学校全体の課題を解決するためには、いきなり全体を変えようとしても難しい。今回の実践では、まずは、学年の一部児童の表現の基準を上げ、それをモデルに、学年全体の基準の底上げを図った。さらに、その学年をモデルに学校全体の基準を底上げしていくことができた。ただし、ただ表現する機会を与えるだけでは、十分な動機付けとはなりにくい。本実践の場合は、マイタウンマップ・コンクールを契機に、外部に対して責任ある情報を発信するという観点をもつことで、意欲的に学習に取り組むことになった。

（2）表現のための多様な学習方法を取り入れる

Web ページの作成に限らず、プレゼンテーション、ポスターセッションなどの多様な表現方法を取り入れることによって、児童は固定化された人物評価を見直し、公的な場所での表現力を高めることができた。

3. 2 教師へのはたらきかけ

（1）実践の負担感を減らす

カリキュラムの構成、外部人材との連携など、実践のノウハウを前年度の Web を基に具体的に示し、実践記録の蓄積方法を工夫することによって、他の教師はさほど負担感を感じることなく、実践を進めることができた。

3. 3 地域へのはたらきかけ

（1）Web ページによる情報公開を行う

児童の実践を Web ページにまとめ、外部評価を得ることで、学校の教育活動に対する理解や共感が深まり、より、協力を得られるようになった。

（2）地域人材から協力内容の理解を得る

学校の意図と地域の人材が求めていることの、相互の十分な理解を図ることで、満足できる協力体制が得られた。